



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Boats Against the Current : A Philosophy of Time in F. Scott Fitzgerald's Works [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	松浦, 和宏
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13410号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74464
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kazuhiro_Matsuura_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称: 博士（文学）

氏名: 松浦 和宏

学位論文題名

Boats Against the Current:

A Philosophy of Time in F. Scott Fitzgerald's Works

(流れる時間を取り戻すために: F. Scott Fitzgerald作品における時間論)

・本論文の観点と方法

本論文は、ロストジェネレーションを代表する作家F. スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald) が描く時間論を明らかにすることを目的とし、作品中に描かれている「過去」に関する主題を主な考察の対象としている。フィッツジェラルドの作品に関して「過去」や「時間」はしばしば議論される主題であり、関連する先行研究も数多く存在しているが、フィッツジェラルドの過去に対する懐古主義的な眼差しが作品中に投影されていると指摘するものが大半である。しかし本論は、作家のそのような傾向を単なるノスタルジアで片付けることはできないとし、作家の深層心理を掘り下げて理解する必要があることを指摘していく。

そのために、本論文は、作家の伝記的な情報を数多く参照するという伝統的な手法をとっており、作家が幼少時代に経験した喪失体験を重視することになる。特にミッチェル・ブライトウィーザーやジョナサン・シフらの先行研究に依拠しながら、作家が生まれる前に既に亡くなっていた2人の姉たちの存在に注目し、亡き姉たちの代わりとして母親がフィッツジェラルドを育てた可能性、さらに、作家自身が姉たちに対する弔いの責任を母から引き継いだ可能性を追求していく。作家は喪の対象である姉の存在を直接的に知らないのだが、そのようないわば「喪の不可能性」が逆説的に作家をして過去を希求させ続けることになったと考え、過去の主題に関連する従来 of 批評に対して十分な検討・批判を行いながら、フィッツジェラルドの作品における時間の主題の特質を説得的に記述することを試みている。

・本論文の内容

本論文は3章から成り、フィッツジェラルドの主要な長編作品の深い理解に到達するために、多くの短編作品の読解を手がかりにしながら議論していく。フィッツジェラルドの長編・短編作品には強い関連性があることを作者自身も示唆しており、実際にそれらにおいて、死者ならびに過去において主人公と関係が絶たれた人物が共通して繰り返し描かれている。そこで、本論文は、まず第1章で、二つの主要な短編作品“Babylon Revisited”と“The Curious Case

of Benjamin Button”を考察していく。二つの作品における「死者」と「罪」という一見関わりのない主題は、そのどちらもが「失われた過去」という重要な主題のヴァリエーションとして理解できる。「過去」に関する問題は、前者の作品においては、亡くなった妻に対する主人公の取り返しのつかない罪として、後者の作品においては、父殺しの罪をめぐる問題として、描かれていくことを本章は明らかにする。そのなかで、両作品には共通して、時間の不可逆性だけでなく、主人公が自らの罪を罪として認識できないことに起因する「喪の不可能性」という主題があることを確認する。

第2章では、短編“Winter Dreams”と長編*The Great Gatsby*を合わせて検討する。二つの作品において、主人公は過去の取り返しのつかない問題に絶えず影響を受け続けるだけでなく、現在の生活においても、一つの行動を繰り返して行っていることを指摘することで、彼らがいわば時間の牢獄の中に閉じ込められていることを確認していく。つまり、主人公にとって過去が現在の問題として生きられていることを指摘する。そうすることで、作品内の登場人物と共通する心理的問題を、過去をテーマに小説を書き続けている作家自身もまた共有しているという事実を浮かび上がらせる。

第3章では、第1章と2章の短編作品の考察をさらに発展させ、フィッツジェラルド作品のなかで最も重要とされる*The Great Gatsby*における時間の主題を議論していく。そのために、特に主人公が「過去を再現する」ことを企図していること、さらに物語の語り手ニックが「判断を保留する」ことを信条としていることに注目する。短編作品で、登場人物たちが過去を繰り返そうとするのは、失われた過去を復元することによって、死者を弔おうとするためであった。一方、*The Great Gatsby*の主人公は、表面的には過去に成就できなかった恋人との関係を、時間の流れに逆らって再現しようとしているように見えるが、やはりその裏では自分が置き去りにした父に対する罪が潜在的にある、とする。主人公が偽名を使い、さらに出自を偽るのは、いわば自分自身を自分で作り上げるため、言い換えれば、自分が自分自身の父親になるためであり、それは実父に対する犯罪、一種の父殺しと見なせるのである。このような主人公の過去の罪が現在を規定する物語の展開を助けているのが、判断を保留しながら事態を見守る語り手なのであり、さらには罪人を断罪しない語り手が未来への希望をももたらすことを指摘する。また、失われた過去の回復を目論む主人公の姿は、死者を弔うという潜在的な企図において、作家自身と重なり合うことも論じられる。

以上のように、3つの章に渡る考察を通して本論文は、時間の流れに対する作家独特の視点を一貫して議論し、その時間観に基づいて作品が創作されていった過程を丹念に議論している。そうすることで、本論文が明らかにしたのは、作家の過去に対する問題意識が、実は、不確かな未来という問題と相似적であることである。フィッツジェラルドの作品では、過去は現実を支える強固な基盤のようなものではなく、むしろ、過去は現在に再現することや、さらには作り替えてしまうことが可能なほど、可変的なものになっており、そのような過去は、同時

に主人公の現在や未来を崩壊の危機にさらすことになるからである。その意味で、過去の再現を試みるギャツビーが、必然的に悲劇の主人公にならざるをえなかったことを本論文は説得的に示している。